

# この頃・・・思う事!

堀田 昌子(7組)



年は取らず、数えず、考えずに生きている私なのに・・・  
中学の時、毎日一緒に行き帰りした鹿児島島の友人に電話をすると、必ず終わりの頃に始まる「〇〇代だから、身体が少しくらいどうかあっても不思議じゃないよ・・・ね?」

子供の頃は、ポケモンの代表みたいな人だったのに、この頃は細かい事を言う普通のおばさんになっている。

一寸待ってよ! 貴女と私は同じ年の筈よね。どうして現実を突き付けるの! そんな事言われなくても随分生きて来たな! と、この頃思う。

私は、あまり自分の事は話さない方だけど、画家が自画像を書く様に、私もこれまでの事を少々書いてみようと思う。

## 《昔・むかしの話》

昭和三十六年の春、内科医の義兄が学位取得の為、昼は医局に通い、夜間開業する事になり、私は昼間は学校、夕方から手伝いをする事になった。

忘れもしない。初めは一日? 一夜に一人ずつの患者で、それが一週間続いた。

その時来てくれた人の名前と顔まで、今でも覚えている様な気がする。

東京の大病院ができた時、病院が栄えてはいけなくて挨拶した院長がいたそうだが、医療と言えど商売である。

人当たりの良い義兄だったし、腕は確か! 手伝いの娘も可愛かったからか? だんだん患者も増え、義兄がめでたく博士号を貰い、私も卒業して、朝から診療する様になった時は、広く大きな場所に移り、看護婦(昔はこう言った)を一人雇い、三人で三年間位は頑張った!



私は、その頃、常連患者の戦争未亡人の「おばちゃん」の家へ、夜になると和裁のけいこという名目で、夕食を作って待っているおばちゃんの家で、夕食・和裁のけいこ・泊まるという生活をしていた。本当を言うと、手は動かさず、口だけ(食べたり・喋ったり)していた。

姉は、私を便利に使って、婚期が遅れてはとハラハラしていた。東京から一寸離れた地方都市、狭い地域の中で私は「やり手の副院長」と呼ばれ有名だった。その筋からは話があったが「そんな政略結婚は嫌!」と断り続けていた。

本当は、月末になると、半徹夜みたいに一週間も頑張らないといけない保険請求を、一生するなんてとんでもない思っていた。

それに、平日は夕食を作って待ってくれる人がいたし、日曜日になると西銀座にある大関早苗美容室に通った。

その美容室は、隣りに女優が座っていることも度々あった。出かける場所を言えば、黙って仕上げしてくれるお気に入りの美容師もいた。

用のない時は、銀座の三軒のデパートをはしごした。欲しい物はだいたい買った。お金が無くても買えた。今の様にカードの無い時代だったが、着払いという便利な制度があった。こんな自由な生活を終わらせたくはなかった。

## 《私の結婚》

ある夜、おばちゃんの家へ東京から親戚だという婦人が息子さんの運転する車で訪ねて来た。おばちゃんが娘さんの縁談を世話するので、その話を聞きに来たの事。その時私は、おばちゃんの仕事部屋で和裁をするふりをしていた。

一週間くらいすると、またその二人が訪れた。前の縁談を断りに来た様だった。その二人の帰り際に、おばちゃんが私を呼んだ。

「京葉道路の入り口は、まっすぐ行って、右折して次の信号を左へ行けば入れます」と、私はその息子さんに教えた。

また一週間くらいした時、おばちゃんに姉が呼ばれた。その夜、私が行くと、「先日のお親戚が来て、貴女の名前を神社の神主さんに見て貰ったら、最高の相性だとのこと、貴女を貰いに来た! 貴女と親戚になれる」と言って泣いた・・・

明治生まれのその母親が言うには、交際合ってから決めるのではなくて、決めるから交際合えとのこと。おばちゃんには泣かれるし、姉は喜ぶで、婚約・結婚決定になった。

その年、その彼の兄が結婚することが決まっていた、一年間、一ヶ月、一度の様な交際をして、次の秋、結婚式を挙げた。ミロのピーナスを見る為、上野の森で長蛇の列におばちゃんと三人で並んだ事は、今でも鮮明に覚えている。

見合い結婚? 恋愛結婚? と聞かれると、どっちでも無いと言っている。「京葉道路! 入り口結婚!」

## 《子供の結婚》

自分の子は、どの子が特に可愛いかは分からないが、ヤッパリ一番初めの子は、自分の知らない未知の中から試行錯誤しながら育てる。そうして育てた長女は、大学の同期生と交際して、しかも地方の自営業。

私の条件に合うのは、三男というくらいで、どんなに反対しても、結婚して遠く

へ行ってしまった。地方のまだまだ派手なところで、結納が三帖はある様なのが来た時には、親戚縁者・友人・知人・近所が後学の為にと見学に来た。

この子に財産分けはしない！ それこそ今でしょーと思ひ、その分出来るだけの支度はした。着物も作った！ 腹が立つので、自分のも負けずに作った！

そんな親娘を見ていた次女は「私は反対される結婚はしない」と言った。

これは良いわ・・・と思ひたが、これがまた万人向きの性格で、年配者から子供まで誰にでも持てる？ 誰か特定の人と交際する様なことは無い。人に頼んだりして合わせたりしても続かない。

私の姉が私に言った様に「一度結婚して、それでも嫌だったら・・・一人住まいしなさい」と、江戸川区に初めて移り住んだ昔の家へ一人で暮らしなさいと、置いて来てみると、次の日には「恐くておれない」と逃げ帰って来る。

この娘より長く生きる自信は私にはない。この娘を残しては死ねない。娘だけは嫁にやろうと固く決意していた。

ある日、ゴルフコースを回りながら友人に、調子が悪くてと言ひ訳し、序に次女が嫁に行かなくて・・・とボヤいた！ その友人が持って来てくれたのが、今は旦那になった人だった。

身上書を見ると、私が若い頃、結婚しない為にイヤミ半分で書いた結婚の条件十ヶ条にピッタリ。その上、私と同じ「一」の字が名前にある。この人しかいないと、私が決めた！

それで作戦を立てた。娘に「自分はもうこの家にはおれないのだなあ」と思ひせ様と娘に辛く当たった。やさしく？ 良い母から、冷たく怖い母に変身。心を鬼にして頑張った。何が効を奏したか？ 娘は結婚することになった。

そこで私は、長女の時と同じ様に主人に「結婚式では絶対に泣かないでね。出て行って来てくれた良かったという顔をして。泣いたら貴男と離婚するから・・・」

長女の時もそうだった。私は娘に言った「貴女は一番上、妹も弟もいる。しかも自分で決めた事。帰って来てくれるな！」

私と娘達のお花の先生の前で言った。先生は「そこまで言うな」と止めたが、私と娘の別々の相談に乗って・・・「結婚したいと思う人は、世の中にそうそうはいない。嫁にやりなさい」と言ったのはこの先生だった！



娘二人の結婚に疲れ、息子の事には口を出さないと私は決めた。まあまあ年の二人共結婚してくれた。

「憎い嫁から・・・可愛い孫。昔の人は良く言ったものだ」と、公文の仲間が話すのを聞かたび、男の子の生活を見ない様にしている私は、ヤッパリ利口？なのだと思ったり、自画自賛している私・・・

### 《この頃の私》

昨年の春・・・私は言ってみて！ 美人薄命と言うから・・・こんな顔でもこう言う場合は、美人の中に入れ・・・

しかも薄命というには、程遠く生きて立派な「あくちゃんだ」あくちゃんとは、ばあちゃんの一ぱだけ取ったもので、当家の孫は皆そう言う。

絶対婆ちゃんなんて呼ばれたくない、若い？ 私が初孫にそう仕込んだら、その子に見習って教えなくてもそうなった。しかもいつもは会わない遠くに住む孫の従姉弟までもがそう呼ぶ！

「どうしても私が先でしょう。私に置いて行かれ、お屋ぐらいは作れるけど、後片付けが出来ない。一人になったらどうするの？ 辛く思いながら片付けするより、楽しく家事も出来た方が良いのじゃない？」

それから同居人は、自分の物は洗う様になった。だんだん、そこら辺にある鍋まです洗い！

この頃はあんまり悪いので「漬けておけば良いのよ」私が言ったりする。心の中は隠して口だけ？

歴史は繰り返す。結婚した頃、母が鍋を洗いにやって来た。

「貴女の洗い方では・・・」と言ひながら。そろそろ来そうだと思うと、母孝行のつもりで鍋は漬けていた。

今では、誰にも負けない大振袖だが、子供の頃は折れそうに細い腕だった。

そんな私を見て、父はいつも「この子を洗濯させる様な家には嫁にやれない」と言っていた。

高校生の頃、便利な洗濯機というのが出て来た「あんまり先々に心配する事は無いのだな！」と、回る水をいつまでも覗き込んだ。

これから先・・・どうなるかは神よしが知る事。

「貴女は気が強そうで本当は弱いから、そういう時は私が付いてあげるから・・・」と未亡人の先輩が言う。

「お願いね、頼むわね！」私も哀願する。でも一寸待って美人薄命！私が先だったはずよね・・・



## 《子供》

私が選んで決めた昌〇さんは、優しい人である。

設計士である彼は、日本は元より海外へも飛び回り、その地の土産を自分の親と私達まで送ってくれる。年に一〜二度は旅行に、そして良い店を見つけたと言っては、食事に誘ってくれる。

以前、私が足をマッサージしたいと話しているのを聞いて、こんなのがありましたと、折に触れては持って来てくれて、我が家に足関係のマッサージだけでも五台はある。『そんなのを集めて一室をジムにして、「ダイエット頑張るぞー。何をやっても成功しない人の為に！」という本も買ったし・・・』と、意気込んでいると、大病した同期生から「太っついていても体力がある方がよいよ!」私の心を揺さぶる、有難い?お言葉がかかってくる』

当家の次男も子供の頃、広告でも見ながら「これステキ!」とでも言おうものなら、自分のお年玉の貯金通帳を持って来て「これで買いなさう!」と、言ってくれる。辞退するのが大変な、本当にやさしい児だった。

親の顔を熟知している息子達に「美人薄命」の話も出来ず「アノね! 女は図太くも生きるけど、男の人はパッ!との事もあるから、父にだけは、誕生日と父の日だけは何か贈ってあげてネ・・・私は良いのよ!」と、頼んでいる。

まさか父だけに、と思うのか、私まで恩恵を受けている。まあその位の優しい男達に今はなっている。

次女も今になつては「お母ちゃまの言う通り結婚して良かった」と言ってくれる。その「お母ちゃま」と言う言葉だが、以前は息子二人もそう呼んでくれた。だが、この頃「ちゃま」なんて言えないらしい・・・

さりとて、お袋とも言えず、何とも声に出さない! だが、私にはもう一人息子がいる。

この子の送ってくれた物をホームパーティーで振舞いながら、いつものジョークで「私の置いてきた息子から届いたのよ」と、デザートを出していたら、長女に“どえらく”怒られた。ヤッパリ自分が、私の一番の子と想いたいらしい。

なので、怒った長女の為にも白状しますが、ライセンス・マニアの私が、今度は調理師免許を取得しようと思った時に出会った人で、その人はすぐに私の事を「お母さん」と呼んだ。

多分、自分の母親と同じ年頃だったのだろう。それがまた「三目には」お母さん」と連発する「そうだろう、お母さん! こうなんだよお母さん!」こんな真合合で

ある。だから、時々その連呼する息子と話して満足している。

その息子の嫁が、地方の果樹園の娘さんで、見事な次郎柿が秋深くに届くと「有難う、もう一人育てなくても息子がいて良かった」感謝・感激しながら、果物好きが食する。

## 《相性》

最高の相性で結婚が決まった筈の私! だが、占いの何を見ても最悪・反対の相性。何故、あの神主さんがそう言ったかわからない!

でも・・・一年前に結婚した義姉は、私達の式の時ハケ月の身重だった。二ヵ月後に生まれた女兒に名前をと神主さんに頼んだら、「雅子と雅美」と言ってきた。親族の中に「まさこ」が二人ではと、雅美と言っ方にした。最もあの頃(昭和四十年代)〇美と言う名の全盛期ではあった。お子様がそついう名の思い当たる方もいらっしやるでしょう?

堀田には、まさこ・・・まさこ思っいらっしやる神主さんのお陰で、この位の生活も出来たのかもしれない。足も向けられない有難い神主さんではある。

## 《名前は出せない同期生の話》

## その①

昭和の頃、アメリカの美智子さん(六組)が、急に帰国。

暑い夏の夜の事・・・我が家は二百メートル余の川に面している。対岸は、千葉県市川市。だから、その屋上は川風に吹かれて格好のピヤガーデンになる。

急遽、同期生十数名が終結した! その中の独り身の彼は、その夜気楽に泊まっていた。

今夜も泊まるのかしらと思っ程、音楽を聴いたりして、ゆっくりして帰った。だから、当家の主を良く知っている。

その彼が、十年程前に「お前とこのダンナ、変わらないか?」と、真面目な顔して聞いてきた。

「年なりじゃないの?そろそろ取り替えようかと思ってるのよ・・・」

私が答えると、間髪を入れず「向こうもそう思ってるのじゃねえか?」と、切り返してきた!

学生の頃から勉強の出来る人だったが、ヤッパリ頭が良いのだなと、つくづく感心した。

その彼、今は我が同期会にも顔を出してくれる、協調性のある素晴らしい方と再婚した。一メテタイ話一ではある。

## その②

二年前の忘年会に、二日前に退院した・・・と言って出て来てくれた彼一皆が心

配する程の顔色で、フラフラしていて、良くこんな状態で出席してくれたと頭が下がった。

カラオケも好きで、以前デュエットした♪木綿のハンカチーフをまた一緒に歌おうと、ハンカチ二枚用意したのに、なかなか歌うチャンスが無い。

奥サマも同期生。彼とは小・中、同じ学校の仲。もう病気がないで・・・ネ。ご希望い！

### その③

一昨年の新宿御苑の花見に、昨日、鹿児島から帰ったという方が駆け付けてくれて、それには大感激した。

屋久島で、この石は何万年前、こっちは・・・との石の説明に、そんな石は置いて来れないと、何個も石を持ち帰り飾ってある。

重かったのよ！ 貴男のお陰で！ でも、貴男の心の方がもっと重く嬉しかった。有難う！ 感謝します！

その他にもいろいろある。

長い汽車の旅で、隣りの方と話しをして意気投合！ 気に入られて、その方の息子さんのお嫁さんになった方。

話しはまだまだある気がする。でも、後書きがそんなに長くなると、本末転倒になりそうなのでこの辺で・・・

皆様！ 生きている間は、元気に楽しく生きて行きましょう。そして、自分から一フケ一老け込まない様にしましょう。

だから、私はいつも思っている。

自分は、玉龍高校三十三回卒だと！ 大先輩の皆様、く宜しく！



## — 草野 大悟 —

草野君と卒業以来初めて会ったのは、中国での映画撮影した「天平の薨」中国口ケはみだし記の出版記念のパーティ会場だった。

杉村春子に認められ「欲望という名の電車に」出ていると言っような風の便りは聞いていたが・・・二十二年ぶりの再会だった！

彼ばかりじゃなく、次々に同期の男性が現れビックリ！ 女の方とはその前に銀座で卒業以来一度集まり十七名と対面していた。

二次会の席上で向いに座っている男性がしきりに私に向かって、指で鼻を指して「私！私！」と言っている。誰だろうと思っていたら、桜島一周！ 大まわりの辛く今は楽しい想い出のサイクリングの仲間！ 柴田君だった。

それから八期会・同窓会の始まりだった。

ある時、新宿を同期生十名位と歩いていたら、先頭に行く私達の中から大悟に気づいて、すれ違つ二十代の女性の中の一人が「私！ この人のファンなのよ」と大きな声で叫んだ。

私がマネージャー気取りで・・・「ありがとうございます、これからもよろしく」と返したら、彼も満足そうに笑っていた！

ある夜の同期会の二次会で、大悟が「これはどんな歌だったかなー」と珍しく聞いて来た。

♪暗い浮世のこの裏町を〜と私がワンフレーズを歌うと「何もそこまで歌わなくて良い」と怒鳴った。びっくりして「何でそんな事で怒鳴るの？」と言つと、「こんなのは怒鳴ると言うのじゃないんだ！ 俺が怒鳴ると、二・三軒先まで聞こえる」と言った。

「へーお宅の奥さん、大変！ 気の毒だね〜」と私が言つのを聞いてか聞かずか？ もう「このうらまちを〜」と得意な顔して歌っていた♪

いつもは下北沢の本多劇場・駅前劇場とかが多かったが、サンシャインとか、大劇場にも出演した。夏の盛りだくさんのように。

同期生が揃って見に行くと彼も上機嫌だった！ その日私は主演の加藤剛に花束を渡す大役を任せつかり、和服など着て出かけた。

モミジの便りもチラホラの九月の中旬・・・

大悟が一番やさしかったのは、一女に分つて、男に分らないものなかに。一の



# Memories of Daigo



お健やかに初春をお迎えのこと存じます。  
 昨年は何かとお世話になり有り難うございました。  
 本年もなにとぞよろしくお願いいたします。

昭和六十一年 元旦

幼なじみ十二年間の、仲なれば  
 ♪ キップ売りの少女 ♪ の役は、  
 降りられそうもありません。

— さて今回の出し物は？ —



「涎れの天使」の時だった。彼の演出でもあった！  
 初演と千穂染が終わると、役者、スタッフ一同揃って缶ビールで、カンパイを  
 する、その中に私を誘ってくれた。売りにくいチケットを売った、私への感謝の  
 気持ちだったのだろう。

後にも先にも、たった一度しかも官製ハガキで年賀状を買った。  
 昨年はお世話になりました  
 それでも今年もよろしく

— そして、あの日がやって来た —

俗に言う最後のお別れ、前へ前へと進む列から、私は後ずさった！旅立ちの演  
 技をしている大悟は見まい！心に固く誓っていた。  
 まわりに早く早くと言われながら、最後に・・・少々噂のあった？大地喜和子  
 が中に消えて行った。  
 やさしかった時の彼・怒鳴りつけられた大悟・笑って顔をしかめた草野君が、  
 いつも胸の中にいる。

